宿泊施設のSDGs経営、首都圏で広がる 取り組み多様に

#ハッシュタグ

#SDGs #千葉 #埼玉

2022/6/1 2:00 [有料会員限定]

千葉県君津市の亀山温泉ホテルは、林道整備で出る倒木をたき火用のまきとして活用している

SDGs（持続可能な開発目標）を経営に取り入れる動きが、首都圏の宿泊施設で広がっている。国連が定める17の目標を達成しようと、ホテルや旅館が展開する活動は様々だ。環境保全や社会問題の解決と企業経営の両立を目指し、社会貢献の姿勢を前面に打ち出す。

房総半島中央の丘陵地帯にある亀山温泉ホテル（千葉県君津市）は「亀山温泉リトリート」と銘打ち、大自然の中でのたき火や散策といった体験プランを提供している。周辺の林道を整備する際、風で倒れた木などを撤去するが、それを廃棄物として処分せず、同ホテルがたき火やキャンプファイアのまきとして活用している。

だから「観光客が来れば来るほど森が奇麗になる」と、同ホテルで自然体験サービスを担当する従業員の豊島大輝さんは話す。たき火が山林の管理につながる仕組みを実践して、持続可能な山の生態系の保全システム構築を図っている。

湖畔でのヨガや自然学校と協力した環境教育プログラムも提供している。「すべての人に健康と福祉を」「陸の豊かさも守ろう」など、SDGsの複数の目標を達成するため多面的に取り組んでいる。

横浜市西区の横浜ロイヤルパークホテルは、開業当初から使用している家具を修理し、改修後も再活用する

ごみの削減は環境保全に欠かせない。横浜ロイヤルパークホテル（横浜市西区）は、1993年開業当初の家具の一部をホテル改修後も修理しながら大切に使い、廃棄物を減らしている。

使わなくなった布団は、羽毛製品を回収して洗浄し、製品として再利用する一般社団法人「グリーンダウンプロジェクト」へ提供。余った装飾用の花もブーケにして販売している。

横浜市がSDGs達成に向け活動している企業などを認証する制度「Y-SDGs」で上位にあたる「スーペリア」を取得した。担当者は「今後も様々な形でSDGs達成に向けた取り組みを推進したい」と意欲的だ。

埼玉県秩父市では古民家や空き家を改装し、宿泊施設として活用するまちづくりが進む

SDGsの目標の一つに「住み続けられるまちづくりを」がある。持続可能な都市化や文化遺産の保全などの必要性を掲げる。

こうした観点での取り組みが、空き家の活用が課題となっている埼玉県秩父市で進む。三井住友ファイナンス&リースなどが出資する秩父まちづくりは、有形文化財の「小池煙草店」と「宮谷家」「マル十薬局」を改修し、点在する3棟を1つの宿泊施設とみなす「分散型ホテル」として整備した。

観光客の回遊を促すため、飲食や宿泊の機能を各棟に分散させた。開業予定は8月。同社は「空き家が多い秩父で、地域の持続性を高めるために考えた。利用客が街を歩くことで魅力を発見するきっかけになってほしい」と説明する。

同市で温泉旅館「ゆの宿 和どう」を経営する町田啓介氏も、市内の古民家を改装して7月に簡易宿泊施設としてオープンする。町田氏は「せっかくあるものだから活用しないと。整備すれば付加価値は付けられる」と力を込める。

新宿ワシントンホテルは天然素材のフォークやスプーンを導入している（5月25日、東京都新宿区）

「利用客が生活する宿泊施設がSDGsに取り組むことで、環境保全の意識が利用客に浸透するのではないか」と話すのは、新宿ワシントンホテル（東京・新宿）の広報担当者だ。

同ホテルは、天然素材のフォークやスプーンを採用してプラスチックごみを減量し、レストランや従業員食堂での調理を一元化して食品ロスを削減する。カフェでは環境負荷の小さい手法で生産されたコーヒーを提供するなど、消費者に身近なところでSDGsを実践する。

衣食住を提供する宿泊施設は、人の暮らしのあらゆる場面で利用客と接点を持つ。食事中や客室で過ごす時間に各施設の取り組みに触れた市民が、普段の生活にもSDGsの視点を取り入れる好循環が生まれることも期待される。（相松孝暢）

#宿泊施設のSDGs経営

2015年の国連サミットで採択されたSDGsという国際目標の達成に向けた活動を推進し、企業価値の向上を図るホテルや旅館の経営手法。歯ブラシといったアメニティーを客室ではなくロビーなどに配置し、必要な分だけ使ってもらいプラごみを削減するのが代表的な取り組みの一つ。環境や人権に配慮した「エシカル消費」の機運の高まりも、SDGsと経営を結びつける動きを後押ししている。